

# ・自選五十首・



上野久雄

うえの・ひさお 1927年、山梨県生まれ。'48年近藤芳美に師事。54年「未来」創刊参加。83年「みぎわ」創刊。現在「未来」会員、「みぎわ」主宰。歌書に『短歌教室Ⅰ』『短歌教室Ⅱ』、エッセイ集に『夢名人』がある。

紙幣つねに明日をもたねば要らぬをば部厚くある日吾は持ち馬匹の臭う陽をくぐりゆく

首う上げて振りて今ゆくキャンターの黒鹿毛くろか一つ花の曇りに

風に乗せ馬券を投ぐる夕日中吾より妻は聡く生きたり

剃刀に負けて血を噴くおとがいをさびしと触れて去りゆきにけり

人はみなコアラの如く遊ぶべく生れ来たりしに誰もかなしむ

爪先にさびしき磁気を吾はもち水仙の黄を一つ殺めつ

いつしかは死ぬかん人を歩ましめきよう浜砂に春の海鳴る

日ののこる石に来ていし夕鮎の水激しければ鱭うごくかな

燈の下に茶碗の亀裂を見ておりぬ人ゆく道のごとくさびしも

意外なる速さに過ぎし夕闇の妻が愛用の自転車あわれ

みずみずしき白鳥は来て吾が書架に佇みていし夏の夕暮

『炎涼の星』

『夕鮎』

歌集を編もうとするとき、一首一首の作品はかなり丹念に選び推奨を加えもする。そしてその時点では「まあまあよろしかろう」と納得するのだが、歌集になったものを見た途端に、作品の上にさまさまの欠陥が見えてきてひやりとする。

刷り上がったばかりの歌集のページを繰りながら、次々と作品への不満が生まれるのであるから、それは年々募るばかりで、ついには思い入れの深かつたはずの自分の歌集を開いて読むのが恐ろくなる。

それは著者として自分が未熟であったからに相違ないが、もう一つは、まだ手の内にある自作の歌を冷静に客観視することができないという、一種自惚れ根性によるものよう

かすかなる量にかたむく幻の秤のごとも秋の日うごく

この夜来しおみななひとり三角にトイレの紙を折りて帰りぬ  
カロリーを計られてくる食膳のメロンに濡れて五月のひかり  
隣室の深夜の音は手のひらに果実をのせて洗えるならん

いずれ又俺を探ささというように芝生に埋もれいたる刈鎌  
この家を救わんとして蜂たちや燕たちは驟雨ののち来も

バスタブの泡より出だす脚青し青年のままわれは老ゆべし  
大空に白鯨のいるあさぼらけ桃咲く村の深きねむりに

女体とうかなしきものを見下ろしておのずからなる現身一つ  
金錢に執着のなき男かな素肌へさらりワイシャツを着る

百万円返してくれぬ友ありきそれ貸しし日のたぬしかりけり  
男にはつねに澄みたるふるさとの光るかに鋭きその若乳房

さはあれど女ぐるいのたのしけれ深傷はにおうトレンチコート  
甲斐駒岳を煙に隠して田の上に大火を焚ける男ありけり

あやまちのためしきは真夜浴槽の深きに銀の腕時計かがやく  
この家に風の集まるひとところガラスの鈴もいつか砕けて

ハミングの女童は来て祖父という寝乱れていし男みてゆく  
納豆を子の飯の上に分けている半袖にてはもう寒い朝

夕暮のガラスに耳を近づけて雪の来るのを聴くごとくせり  
葉にそそぐ醤油がすこし過ぎますと春は春とて氣の立つらしも

「バラ園と鼻」

「喫水線」

である。だから歌集になった作品と冷静に對  
い合っているとき、同じ歌集をもう一度作る  
ことができたらなあと、切実に度々思うので  
ある。

自選五十首の作業は、忘れたいとさえ思っ  
ていた歌集をとりだして読まなければならな  
いという、一種辛い作業ではあった。しかし、  
未熟な作品たちであっても読み始めるとどの  
歌も忘れ難い記憶を甦えらせてくれて、一入  
の懐かしさに浸ることもできた。

一歌集約四百首中から夫々十首宛選出とい  
うことで、これもかなりむずかしいことだっ  
た。読者にせめてその歌集の匂いくらいは感  
じ取ってもらえるようにと、秀歌をというよ  
り私らしい独自さのあるものを心掛けて選  
った。しかし、十首や二十首ではとても駄目、  
これを機に、誰か一冊そっくり読んでくれな  
いかなあと切実に思うばかりである。私と私  
の歌を知ってもらうために、臆面もなくそう  
希いつつ選歌した。

短歌一首を完成させるには、なまかなこ  
とでは叶わない。何かを表現するためには、  
「これ以外にない」というフレーズを探しあ  
てるまで追求するのが詩人の果たす義務であ  
ろうと、悔い多き歌集を再び熟読しながら思  
ったことであった。そして、次の歌集を編む  
日がとても楽しみになってきたりもした。

指先のそれに触るればこれの世の暗黒となるそれに触るべし

我が自負よ朝の湖に映している一本杉のふかきむらさき

雪虫はこのベンチを訪れず忘れられている補聴器一つ

完走をなせし男の子はゆらゆらと紙飛行機のごとくまわります

おもいのほか軽ろき荷一つ負うごとくこころしずかに秋の日を病む

花のなごり日増しに消えてじゃが芋のま新しきが味噌汁に入る

単線のレールの草の刈られあり明日の朝またここ過ぎる列車

芝の上のわが椅子倒し昨夜またさびしく八ヶ岳嵐ゆきしか

ハンドルの手許に及ぶ水明かり湖の東にはもう日はなくて

ねむりゆく闇に思えば亡骸にまわりつづけていし扇風機

墓石の上に誰ぞ置きたる胡桃の実いかにも不安定なる木の実

「冬の旅」

この庭は大雨、甲斐駒岳は雪、われはぐっすり眠りし昨夜

液状の糊こんもりと冬の夜の机に洩れていることのある

助からぬ病と聞きぬ、これの世に助かる人のもし誰かある

燃えさかる炎を掴むためみずからを火となす齡すぎたりしかな

夜具の縁に雪の香のこし去りしなりきつと戻ってくるさねむりは

ギヤマンに甲州葡萄彩なせり、目立たぬ位置に君あり給え

修正液の白濁のなかに固まりし晩秋の蚊を見たるさびしさ

また春がきて健気にも咲き初むる畑中の辛夷、お前も無名